

日本社会の地域性

城西大学副学長 蓼 沼 康 子

日本は、決して広い国ではない。しかし、それぞれの地域を見ると多様性に富んでいる。日本社会の地域性の研究は、農村社会学、社会人類学、日本民俗学をはじめとする多くの分野のテーマとされてきた。日本社会を理解するために膨大な業績が残されている。ここでは、日本社会の地域性研究の歴史をふまえ、地域社会とは何かを考えてみたい。

近代化以前の日本社会は、農村社会であった。従って、農村社会学者たちによる研究は農村の研究というよりは日本社会の構造分析であった。農村社会学者の鈴木栄太郎は、「自分たちの研究は、アメリカ合衆国の文化人類学に近い」と述べている。日本各地の調査から集まったそれぞれの地域の実態をもとに、多くの議論がなされた。

日本社会の地域性は、「日本社会の二類型」という形での議論となっていった。福武直『日本農村の社会的性格』（1949）などに始まる「東北型」「西南型」と言われるものである。日本民俗学の柳田國男、社会人類学の蒲生正男らによるテーマとして「日本社会の地域性」が議論されていく。

東北日本では、同族に代表されるような本分家関係、地主小作関係などにより村社会が一方向に上昇していく関係により村落構造が作られている。一方、西南日本では、村の役職が順番に回るしくみがあり、神社組織も年齢階梯により順番に役職が変わるなど平らな構造になっている。もちろん、日本社会の特徴とされる「家」は、東北日本にも西南日本にも存在し、親族のつながりも存在したが、村々で調査をした彼らにはどうしてもその違いが見えたのであろう。たとえば、家族についても、跡取りが結婚したら同じ敷地内に世帯をわけて、別棟に親夫婦が住む隠居制は、福島県を北限に存在する。

岩手県の北西部秋田県に近い山間地に位置する「石神」という地域は、有賀喜左衛門が1935年に調査し、その後東北日本型の社会を代表する村のように取り上げられてきた。福武直は、「東北型」として秋田県大館周辺の村をとりあげ、「西南型」として岡山県吉備町の村を取り上げている。

この二類型に加えて、日本各地の実地調査が進み、長崎県五島、鹿児島県奄美などの地域を含めた地域性の研究が続いた。その際に、地域による差異をどのようにとらえるかが問題となる。もともと日本であるから、共通する部分が多い。「家」が存在する点などである。しかし、大きな家族を志向する東北日本と小さな家族を許容する西南日本の違いは存在する。これを、質の違いととらえるか、量の違いととらえるかである。日本社会の同質論、異質論ともいわれるものである。

日本には多様な地域があり、そこで人が暮らしている姿を事実として受け入れて、それはなぜかを考えていく。それを積み上げてきた日本社会研究は、異なる方法論を用いて今後も明らかにされていくであろう。しかし、近代化の結果、日本社会は一つの価値で動いている。日本社会の地域性は、今後どのようにとらえられていくのだろうか。